

音楽教育研究報告

研究主題

音楽の良さ・美しさを価値判断し、
味わって聴く力の育成を目指した鑑賞教育の研究
～共通事項を用いた、音楽的知覚・感受の能力育成を礎として～

神戸市中学校教育研究会音楽部会

平成26年3月

I. 研究主題

音楽の良さ・美しさを価値判断し、味わって聴く力の育成を目指した鑑賞教育の研究
～共通事項を用いた、音楽的知覚・感受の能力育成を礎として～

II. 研究主題設定の理由

現学習指導要領の実施に伴い、評価の観点が整理された。鑑賞領域においては、前の指導要領が「音楽の感受」と「鑑賞の能力」を評価していたのに対し、現学習指導要領では「鑑賞の能力」にまとめられた。つまり、鑑賞領域のみの授業計画を行う場合、評価の観点は「関心・意欲・態度」と「鑑賞の能力」のふたつになった。また、あらたに「共通事項」として、音楽を形づくっている要素や音楽の表現記号など、音楽の鑑賞活動の支えとなる事項が示された。鑑賞の学習活動をするにあたって、これら共通事項を、段階を経ながら指導の過程に組み込む学習計画を考えていくことが肝要である。

しかし現実には、授業が楽曲の解説に偏り、いざ評価となると、その材料は聴き取りテストか感想文というケースも少なくないという声もあった。音色を聞いて楽器名を答えたり、拍子やリズムを聴き分けたりする実音テストはできても、教材や題材のめあてに沿った評価となると難しい。研究を始める前の本研究会では、鑑賞の能力を育て、音楽を味わって聴く楽しみを体験させるためには、教師自身が教材の何に力点を置き、どのような能力を付けることを目的とするのか明確にした授業の蓄積が必要であると考えた。

「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」これは学習指導要領の示すところの音楽科の目標である。

この中の「音楽を愛好する心情」は音楽のよさや美しさを感じ取る事によって形成される。よさや美しさを感じ取る過程においては、音楽の構造と曲想の関わりや、楽曲の背景となる風土や歴史について理解することが求められる。これは、鑑賞の指導内容として示された内容そのものである。

また「音楽に対する感性」は音や音楽を、価値あるものだと感じたり、心地よいと感じたりする心の働きを意味している。二通りの演奏を比べたり、異なる音色の演奏を比べたりして、自分なりのよさや美しさを価値判断し、根拠を持って意見を述べることの大切さは、学習指導要領にも掲げられているところである。自分がよいと思ったものを、隣の生徒は良いと思わないかもしれない。人それぞれに感じ方やとらえ方には違いがあることを理解しながらも、自分なりのよさや美しさを感じ取って音楽を楽しむ心情を育てる事が肝要である。「感性を育てる」「感受させる」とは、単に感じたままを好き嫌いで分別するのではない。構成や様々な要素から生まれる楽曲のイメージを、自分の物差しで分析し、よさや美しさを見つける力を育成することである。これもまた、鑑賞教育の中で育てられる力である。

音楽科の目標のしめくくりは「豊かな情操を育てる」ことである。美しいものを美しいと感じる心、美しいものや優れたものに接して感動する心を情操という。音楽科の目標に鑑賞活動は深く関わっている。音楽教育において鑑賞教育の果たす役割が大きいことを示していると言える。

我々は、鑑賞教材との多様な出会い方と題材の構成を考え、精選された教材を鑑賞することで、音楽のよさや美しさを感じ取り、自分なりに分析して、共通事項に示された内容を理解した上で、共通の言葉で自分の考えを述べる力、これを養成するための授業づくりを課題ととらえ、授業の組み立てと評価をどうするかを念頭に置きつつ研究を進めていくこととした。

III. 研究の概要

1. 教材の精選

鑑賞教材となる楽曲には大きく分類して、次の3種類あると考えた。

① 3年間の音楽の授業でじっくりと聴かせたい楽曲

これらの楽曲は鑑賞の能力を高める主軸となる曲であるので、題材をどのようにするのかよく考じじっくりと時間をかけて取り組みたい教材である。全日音研兵庫大会では鑑賞グループが、「ブルタバ」に取り組んだ。

② 表現領域と共に学習することで生かされる楽曲

表現領域と鑑賞領域で相互に関わり合うことで、より深く音や音楽のよさ、美しさを感じ取り、表現したり味わったりすることが期待できる。全日音研兵庫大会では、伝統音楽グループが、長唄「勸進帳」と歌舞伎「勸進帳」を取り扱った題材に取り組んだ。

③ 参考曲としての楽曲

表現領域の教材と関連した鑑賞教材や、鑑賞領域の題材に因んで、復習や学力の確認に用いる楽曲である。知覚・感受する活動を通して、聴く力の定着に効果的であると考えた。全日音研兵庫大会では、鑑賞グループの「ブルタバ」や、器楽グループのアーティキュレーションの学習活動の前に、参考曲を用いた。

鑑賞活動によってつけたい力があり、それを習得するためにどの曲に出会わせるかを考える時、大切なことは指導のポイントを教師が明確に示すことである。教材を教えるのではなく、つけたい力のために教材を使う。全日音研兵庫大会の授業者のことばを借りれば、「ブルタバ」を教えるのではなく、「ブルタバ」で教えるのである。今となってはグループの誰もが当然認識できるが、この点が2年間の研究で最も越えがたいハードルであった。

2. 教材との出会いの創出

鑑賞領域の学習において、生徒と楽曲をどう出会わせるかは、たいへん大きな課題である。単に楽曲名や作曲者、曲の構成を説明するだけでは、生徒の関心を高めることは難しい。生徒の成長段階に合わせ、学習のめあてを明確にすることで、関心は高まる。めあてとなる、つけたい力が明確であれば、複数の演奏や教材を対比させるにしても、様々な背景についての理解をさせるにしても、ねらいが横に逸れることなく、生徒も迷わず安心して楽曲と向かい合えるのではないかと考えた。生徒の関心を高めるために、教材との出会いを最大限魅力的に演出するために、とくに題材の導入については、試行錯誤を繰り返し、十分に検討の機会を持った。

3. [共通事項] の定義

授業の導入を終えた生徒たちは、音楽を味わって聴くために、音や音楽を形づくっている要素を知覚し、それらがもたらすイメージを感受しようとする。その後、知覚・感受したものを、自分なりに分析し、価値判断し、心地よさや美しさ、自分の感じた音楽のよさについて、言葉で表現をする。

この学習過程で必要なのが、意見交換する際に、誤解のない共通で認識できる言葉の存在が必要であり、それが[共通事項]である。

[共通事項]で示す音楽を形づくっている要素や、音楽表現のための記号は、単にそれぞれの名称を知るだけでなく、音楽活動を通してそれらの働きを実感し、学習に生かすことができるように配慮することが大切であると学習指導要領解説にあるように、[共通事項]に示された音楽の諸要素や音楽表現のための記号

は、音楽のよさや美しさについて言語表現するための共通の言葉でなければならない。知覚する作業を繰り返すことにより、生徒は自然に〔共通事項〕の内容を理解し、それらを使って自らの思考や価値判断について述べることができるようになる。さらには味わって聴く力の伸長につながると考えた。

4. 題材構成の工夫

3カ年で、音楽の良さ・美しさを価値判断し、音楽を味わって聴く力を育成するためには、鑑賞領域のみの授業を計画するだけでなく、表現領域の歌唱・器楽・創作の各分野と相互に関わらせながら題材の配列を考えていくこと、題材構成が重要であると考えた。

今から取り組もうとする題材の前に、どのような学習があり、今の題材を終えた時、どのような力がついているのか、また本題材で付いた力は次の段階でどのように発展するのか、題材の縦のつながりが題材構成の縦軸である。また、鑑賞活動で学んだことが表現活動で生かされ、表現活動で創意工夫したことでより深く鑑賞できるというように、題材の横のつながりも大切である。これが題材構成の横軸となる。

生徒は縦軸と横軸を基盤として鑑賞領域と表現領域の学習を重ねながら、スパイラル状に音楽の学力を向上させていく。鑑賞の能力も向上し、自分の価値観で思考判断し味わって聴く力が育成するために、3年間の、表現領域3分野と鑑賞領域を総合的に捉えた題材構成を考える必要があると考え、2領域4分野の3カ年計画を作成するに至った。

5. 味わって聴く力の育成

鑑賞する際の「聴く力」は、刺激をすればするほど鋭くなり豊かになる。生徒が音楽から知覚・感受したものをもとに、思考・判断して音楽のよさや美しさについて、自分のことばで語るとき、教師の想定を越えた生徒の気づきが認められることがある。鑑賞の授業の醍醐味でもある。

美しい音楽は理屈抜きで美しい。良い音楽は、何も知らずとも心地よい。しかし、音楽の諸要素の働きや楽曲の背景となる歴史や文化、風土を知ると、好きか嫌いか、または心地良いか、そうではないかという短絡的な価値判断ではなく、良さを見つけて自分にあったものを選ぶ、より深い聴き方ができるようになる。それが、味わうということであると考えた。また、自分の考えで価値を判断し、自分と異なる感性を認めつつも、自己主張することは、音楽に限らず、人間関係や生徒の人生そのものにも大きく影響するであろう。こうして育まれた力は、教科を越えた学力として、生きる力として、重要であると考えた。また、2年間の研究の過程で、持続可能な社会づくりの担い手を育むESDの考え方が、日本ユネスコ国内委員会および文部科学省から提示された。ESDの観点からも、味わって聴く力の育成が、今後求められる力につながるのではないかと考えている。

IV. 全日本音楽教育研究会全国大会兵庫大会との関わり

研究については、全日本音楽教育研究会全国大会兵庫大会の研究を兼ねて進めてきた。本研究の補足として、全日音研兵庫大会および、中学校部会のテーマについて述べさせていただきたい。

兵庫大会では、大会主題を「つながる 音・人・心」とし、各校園種の連携やそれぞれの校種の特色ある取り組みをお互いに理解することで、生涯にわたって音楽を愛好する児童・生徒を育てる音楽教育のあり方や、その意義について考え、再認識する場として、研究を進めてきた。

特に研究部では、義務教育である小学校と中学校の連携については力を入れて取り組んだ。研究体勢については、小学校・中学校共に鑑賞・歌唱・器楽・創作（音楽づくり）の4つの分野に分かれて研究を進めた。小学校と中学校を貫いた9カ年計画を作成したことで、指導内容や教育課程についての相互理解が進んだ。また相互に

授業を見学し、合同で実技研修会や研究会を行えたこともたいへん有意義であった。さらに、大会誌には幼稚園と高等学校の指導内容を加えた、15年という長いスパンでの指導計画を提示するに至った。

また大会主題を実現させるために“思いや意図を持って”児童や生徒が表現したり鑑賞したりできるようにすることと、“知覚・感受したことを、思考・判断し、表現したり味わって聴いたりする”過程を大切にすることを、共通理解事項としてそれぞれの校種の実践に生かすこととした。

1. 大会主題との関連

音・人・心の何が、何をつなげるか、何とつながるか、どうつながるかによって、多様な課題が見えてくる。中学部会では、「つながる」を、次のような視点から考えた。

(1) 音から音楽へ

音と音がつながると音楽となる。

音のつながりを「旋律」と解釈し着目すれば、順次進行や跳躍進行、また我が国の音楽特有の節回しなどのような旋律の特徴は、その旋律の持つ固有の曲想につながる。

長唄を唄う学習では、音のつながり方に着目をした。西洋音楽とは大きく異なる旋律(節回し)を知覚・感受し、その特徴や曲想から、我が国の伝統音楽への理解を深める。学習活動を通じて我が国の伝統音楽に対する愛着を感じるだけでなく、我が国の音楽を受け継いできた人々の感性や価値観にも繋げたいと考えている。

音楽は、世界の様々な国や人々、また様々な歴史的背景ともつながる。楽曲には、その曲がもつ独特の味わいがある。音楽には必ずその曲が生まれた背景がある。このような音楽の特徴とその背景となっている文化や歴史、また文学や美術などの他の芸術とを関連づけて表現したり鑑賞したりすることは、音楽が人々の暮らしの中で大切に育まれてきた文化であるということ、生徒自らの感性でとらえ、理解する活動につながる。作品を介して、生徒たちは楽曲の作者や、楽曲が生まれた国の風土や文化、歴史とつながる。我が国を含む世界の国々の、具体的な事象や歴史的背景を知るだけでなく、音楽が媒体となって共感する心や寄り添う心が芽生え、自己を主張し自らを高めていくだけでなく、他の価値観を理解し、共感できる広い視野の育成にもつなげたい。

(2) 題材構成の工夫

ある題材の学びが、次の題材とどうつながっていくかは、学ぶ生徒にとってとても大切なことではないかと思う。そして次の題材には、縦のつながりと横のつながりがあると考えた。

縦のつながりとは、各分野の題材について、3年間の見通しを立て題材構成を考えるということである。

たとえば、A表現 歌唱A に関して、「赤とんぼ」、「夏の思い出」、「花」を取り扱い、1年次で学んだことをもとに2年次の学習を考え、さらに3年次に発展させいく。このように、同じ分野の中で題材が発展していくような配列や内容を考えることで、学びがつながり、育てるべき力が明確化する。

横のつながりとは、2領域4分野相互の関わりである。各分野の学習活動が、有機的かつ効果的に関連づけられることは、生徒の学習への意欲を喚起し、生徒一人一人の個性や興味・関心を生かすことにつながる。たとえば、「夏の思い出」で休符について考え、音楽の表現記号の意図を感じ取って工夫を行う学習で付いた力は、オペラアリアを鑑賞する学習で、より深く登場人物の心情と音楽の関わりを味わって聴く学習に生きてくる。

全ての分野が調和し、互いに影響し合えるように題材の配列を考えることにより、生涯にわたって音楽を愛好する心情の裾野も広がると考えられる。

(3) 小集団による学習の推進

今回の研究発表では、全ての分野において小集団による学習を公開する。生徒相互の関わりをたいせつにし、音楽の学びの定着と言語活動の充実を図るために、小集団でどのように活動させるかを課題としてきた。人数については、最も話しやすく、ひとりひとりに適度な緊張感と責任感が生まれることから、基本的に4人組で授業を行う。また、生徒には司会・記録などの役割を設け、ひとり一役担うことにした。グループ学習では、生徒同士ではたらかかけ合う場面が増える。役割を明確にすることで、はじめは戸惑う生徒たちも、徐々に自分の意見が言えるようになり、自分の中にある漠然とした思いを、音楽や言葉でどのように表現すれば良いのか、表現のスキルを学んでいく。

また学びを個に定着するために、集団の学びの後に、個の学習場面を設けた。個で知覚・感受したことを、集団で深め、そこで育った力を確認するために、個に戻って学習を振り返る。学習のしめくりで何を問いたいかということを確認すると、指導内容が精選され、発問やワークシートの工夫すべき点が明瞭になったと感じている。

2. 中学校部会主題について

「育てよう 感じる心と確かな力 ～個で学び、集団で学び、個に還る～」

大会主題を受け、中学部会では 音や人や心がつながるために何がたいせつか考え、研究主題を設定した。

学習指導要領の音楽科の目標には、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」とある。

(1) 感じる心

音楽を愛好する心情は、音楽活動によって生まれる喜びや楽しさを実感したり、音楽の構造と曲想とのかかわりや背景を理解したりすることを通して育つ。「音楽は楽しい」「音楽が心地いい」というような気持ちを持ち、生活に音楽を生かしたり、自発的に音楽を楽しんだりしようとする姿勢は、音楽のよさや美しさを感じとることによって形成される。

この音楽のよさや美しさなどの質的な世界に、価値を見いだす心の働きが感性であり、その感性こそが、育てたい「感じる心」である。心が感じるためには、音や音楽を主体的にとらえる必要がある。音や音楽を知覚し感受するとき、心地良いだとか、活力が湧いてくるというように、生徒の心の中で、音や音楽が意味あるものとして位置づけられ、生徒ひとりひとりの価値観に基づいた音楽の楽しみや味わいにつながっていく。育てられた感性は、美しいものや優れたものに接して感動する情感豊かな心を育み、それは豊かな人間性の育成にもつながっていくと考える。

美しさを求める音楽の欲求には限りがない。また審美眼を磨けば磨くほど、多様な価値観に気づき、それを許容したり認めたりしようとする心のはたらきが生まれる。

人は山道を登るとき、木々に覆われた山の全貌を見ることも、頂の向こう側を見ることもできないが、頂に立てば、四方を見渡し、山はおろか山の連なりをも目に納めることができる。音楽科の授業において、音楽の学習を通して感性を磨くということは、音楽という山の頂に立つだけでなく、異なる世界観であったり、異なる教科であったり、様々な世界や分野への拡がりを見ることができるとは思えないだろうか。それは、我が国の教育が目指すところの「生きる力」の大きな原動力となり、音楽教育の意義であるとも考えられる。

(2) 確かな力

質のよい感性を育てるためには、情操だけでなく音楽活動を行うための基礎的な能力が必要になってくる。中学部会では、音楽活動をする上で必要な「基礎的・基本的な知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」に、「コミュニケーションの力」を加え、確かな力と考えた。

「基礎的・基本的な知識・技能」とは、音楽を理解する窓口となる音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る力である。また、音楽活動を行うためには、音楽に関する用語や記号の意味を知ったり、読譜の能力があったり、発声法や楽器の奏法などの知識や技能も必要となる。今回の研究では、生徒全員に習得させる力が何なのかを明確にして指導の工夫を行ってきた。

「思考力・判断力・表現力」とは、音楽そのものや音楽形づくっている要素から、楽譜のうらにあるものを読み取ったり感じとったりしながら、思考・判断することによって、思いや意図を持って表現する力と考える。知覚・感受したものを思考し、自分にとっての価値判断を行う学習を、何度も繰り返し行うことにより、少しずつ感性が研ぎ澄まされ、自分の価値観において、よさや美しさを価値判断する基準が生まれてくる。中学生にとって、時間は要するものの、繰り返すということはたいへん意義がある。

自分の価値基準があいまいで、表現の技能も鑑賞の能力も未成熟な中学生にとって、大きな存在となるのが環境である。周囲が歌えば歌いやすいし、誰もができていることは自分も何とかしてできるようになりたいと思う。また生徒たちは「認められたい」「わかりたい」「できるようになりたい」という欲求をもっている。そこで、今大会では、生徒が共に学ぶ小集団による学習の形態を提案した。その効用はたいへん有益で多彩であることが、研究から見えてきている。一斉授業と小集団による学習を取り混ぜて行うことにより、生徒の語彙が豊富になったり、表現をすることへのハードルが低くなったり、互いを尊重する心や、自分が役立っているという自己有用感にもつながっている。

(3) 研究の課題

中学部会では、これらの力の伸張と定着を図るために、研究を進める上での課題を明確にした。それが次の5つの項目である。

- ①題材のねらいと指導内容の明確化
- ②教材の精選
- ③表現及び鑑賞の活動を支える技能の定着
- ④評価及びワークシートや発問の工夫
- ⑤わかる授業・楽しい授業の実践

各グループがこれらの課題に向き合いながら、ひとつの音、ひとつの教材にこだわり、研究を進めてきた過程を示せるよう、資料を準備させていただいた。ご意見を頂き、さらに研鑽に努めたいと考えている。

V. 研究の実際

本研究を始めるにあたって、平成22年度の鑑賞領域研究会では次のような課題が提示された。

- 生徒の関心や意欲を引き出す「楽曲との出会い」をどう演出するか。
- 生徒と音楽について語る際の「共通のことば(音楽用語)」の理解をいかに徹底するか。
- 生徒の感性を高める教材をいかに選んでくるか。
- さまざまな音楽の要素を感じ取るトレーニングを指導計画にどう組み込んでいくか。

そこで、鑑賞教材との多様な出会い方と題材の構成を考え、精選された教材を鑑賞することで、音楽のよさや美しさを感じ取り、自分なりに分析して、共通事項に示された内容を理解した上で、共通の言葉で自分の考えを述べる力、これを養成するための授業づくりを課題と考え研究を進めてきた。

<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; width: 60px; height: 60px; display: flex; align-items: center; justify-content: center; margin: 0 auto;"> <div style="text-align: center;"> <p>鑑賞</p> <p>3年</p> </div> </div>	<p>中学校部会 公開授業 湊翔楠会場 神戸市立垂水東中学校 授業者：壽 哲志</p> <p>題材名 音楽に込められた作曲家の思いを感じ取ろう</p> <p>教材名 スメタナ 連作交響詩〈我が祖国〉より「ブルタバ」</p>
--	---

1. 学習指導要領の指導内容

- B 鑑賞 (1) ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと
- イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解し、鑑賞すること。

〔共通事項〕 本題材における学習内容

音色	管弦楽の楽器による音色
旋律	調, 音階, 音のつながり, 旋律のもつ方向
強弱	場面に応じた強弱の変化
速度	場面に応じた速度の設定および変化

2. 題材について

(1) 題材観

本題材では、音楽の特徴から生み出される曲想と情景との関わりや、作品の歴史的背景を理解し、作曲者が曲に込めた思いを感じ取って鑑賞することを目標とする。教材の「ブルタバ」はチェコを流れる川の様子と森や村、城などのチェコの特徴的な情景を表した作品である。風景画を見るような音楽の中に、作曲者の祖国への思いが描かれていることを、歴史的な背景を理解し、音楽とかがわらせる学習を通して学ばせたいと考えている。生徒は音色や旋律、強弱、速度などからその音楽の特徴をとらえ、描かれている情景とかがわらせて聴く。その後、当時のチェコの様子を知るなどして、楽曲の歴史的背景との関連を理解する。知覚・感受した音楽の特徴や、表現されている情景に加えて、歴史的背景を意識しながら、再び楽曲を鑑賞する。このような活動を通じて、より深まりのある鑑賞活動になると考えた。作曲者の思いを感じ取るとともに、楽曲が今もチェコの人々に親しまれていることなどから、音楽が伝えてきたものについても考える機会とした。

(2) 研究主題との関連

① つながる

生徒は「ブルタバ」を鑑賞し、音楽の特徴や曲想と歴史的背景をかがわらせて理解することから、スメタナが作品に込めた思いを感じ取る。神戸の中学生が、19世紀のチェコの作曲家スメタナの祖国を思う気持ちに共感できたとき、作品を媒体として聴き手である生徒とスメタナがつながると考える。

また、学習を進める中で、自分で考えをまとめながら、グループ学習で意見交換を行い、様々な捉え方を共有する。自分と異なる視点や価値観の意見を聞くことは、自分の思いと他者の思いをつなげ、音楽の味わい方を広げられると考えている。

② 感じる心

本題材では、音楽の特徴と情景を関わらせて理解し、それらが生み出す雰囲気や曲想を感じ取る。また音楽の特徴や情景と時代背景を関わらせて理解し、作曲者の思いを感じ取る。

「ブルタバ」は川の流れなどの情景を音楽で表したものであるが、当時のチェコの時代背景を理解して鑑賞することで、単にチェコの風景の情景描写をただけではなく、作曲者の祖国を思う強い気持ちが生徒は理解する。このような学習を通じて、音楽に込められた作曲者の思いをより深く感じ取ることができるようになる。さらに「プラハの春」の演奏を視聴することで、「ブルタバ」に対するチェコの人々の思いも感じ取らせたい。

③ 確かな力

作曲者の思いを感じ取って鑑賞するために、①音楽を形づくっている要素（音色・旋律・強弱・速度）がどのように働いているのかを知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気や曲想を感じ取る力、②背景と関わらせて理解し、楽曲に込められた作曲者の思いを考える力、③自分なりに価値を判断し、根拠をもって批評することのできる力を育てたいと考えている。また客観的な理由を基に、根拠をもって楽曲を評価するための、言葉で表す力も育みたい。

(3) 生徒観

情景を描いた教材で、音楽の形づくっている要素の働きから生まれる曲想と情景をかかわらせて鑑賞する学習として、1年次に「春」「魔王」を扱った。また、背景となる文化や歴史と関連付けて理解し鑑賞する学習として、2年次に「フーガ短調」「交響曲第5番 ハ短調」を扱った。

生徒たちは、音楽を形づくっている要素を知覚することや、楽曲の背景とのかかわりを理解して、鑑賞する学習においては積極的であり、学習効果が見られた。一方、音楽の特徴から感じ取った雰囲気や曲想を言葉で表したり、自分で価値づけをし、よさや美しさについて批評をしたりする活動では、消極的な面が見られた。本題材では、祖国への思いを描いた楽曲を鑑賞する。音楽の特徴や曲想と時代背景をかかわらせて理解することで、自分がよい、美しいと思ったことについて、言葉で表すなどして、解釈したり価値を考えたりすることを大切にしながら、鑑賞活動に取り組ませたい。

(4) 教材観

「ブルタバ」は、表現する情景によって音楽を形づくっている要素に変化があり、音楽の特徴や曲想を感じ取りやすい。また、「ブルタバ」は、国民楽派の代表的な作曲家であるスメタナが、祖国を思い作曲した連作交響詩「我が祖国」の第2曲であり、音楽と歴史的な背景とが深く関わっているため、作曲家の思いを感じ取って聴くという題材に適していると考えた。

また、「ブルタバ」より、源流やブルタバの流れ、聖ヨハネの急流など、川の流れに注目して、鑑賞する場面を選択した。

3. 題材の目標

- 音楽を形づくっている要素の働きが生み出す曲想と時代背景をかかわらせて理解し、作曲者の祖国への思いを感じ取ることが意識しながら、曲のよさや美しさを味わって聴く活動に主体的に取り組もうとしている。
- 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気や曲想を感じ取って、背景と関わらせて理解し、作曲者の思いを感じ取って、根拠をもって批評し、味わって聴いている。

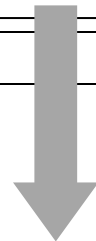
4. 題材の評価規準

観点 I	観点IV
音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
<p>① 音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気を感じ取りながら、曲想や情景との関わりを考える学習に主体的に取り組んでいる。</p> <p>② 作曲者の祖国への思いを感じ取るために、音楽を形づくっている要素の働きが生み出す曲想と時代背景を関連付けて理解し、曲のよさや美しさを味わって聴く学習に主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>① 音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気を感じ取りながら、曲想や情景との関わりを理解して、よさや美しさを味わって聴いている。</p> <p>② 音楽の特徴や情景と、時代背景を関連付けて理解し、作曲者の思いを感じ取って解釈したり、価値を考えたりして、根拠をもって批評し、鑑賞している。</p>

5. 指導計画と評価計画(全3時間)

	◇ねらい ○学習内容 ・学習活動	評価規準と評価の方法
第1時	◇音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）と曲想や情景の関わりを感じ取って聴く	<p>評価の場面《I》</p> <p>【音楽への関心・意欲・態度①】</p> <p>音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気を感じ取りながら、曲想や情景との関わりを考える学習に主体的に取り組んでいる。</p> <p>〔観察〕〔ワークシート〕</p>
	<p>○「ブルタバの2つの源流」を聴き、何を表現しているのか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）を知覚し、この音楽が、何を表現しているのかを考える。 <p>○「聖ヨハネの急流 (E)」前後の「ブルタバの流れ」を聴き、何を表しているのかを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> Eの前の「ブルタバの流れ」を聴く。 音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）を知覚し、曲想を感じ取って、情景とのかかわりを考える。 Eの後の「ブルタバの流れ」を聴く。 音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）を知覚し、曲想を感じ取って、情景とのかかわりを考える。 <ul style="list-style-type: none"> 2つの主題の変化について、情景の変化とのかかわらせてグループで話し合う。 グループで話し合ったことを発表する。 	

第2時	<p>◇音楽の特徴や曲想と情景や背景を関わらせて理解し、解釈したり価値を考えたりし、味わって聴く。</p> <p>○「聖ヨハネの急流」を聴き、音楽の特徴を知覚し、曲想を感じ取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）を知覚し、曲想を感じ取る。 ・情景との関わりを考え、よさや美しさを味わう。 <p>○Eとその前後の「ブルタバの流れ」を、川の映像と合わせて視聴する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽の特徴と川の様子をかかわらせて理解し、曲のよさや美しさを味わって聴く。 <p>○スメタナ作曲当時のチェコの歴史的背景を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地図（教科書 p28）から、19世紀後半と現在の、チェコ周辺の変化に気づき理解を深める <p>○Eの前の「ブルタバの流れ」から曲の終わりを聴き、作曲者の思いについて考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽の特徴や曲想と歴史的背景をかかわらせて理解し、作曲者がどんな思いを込めているかを考える。 ・グループで話し合い、意見交換をする。 	<p>評価の場面《II》</p> <p>【鑑賞の能力①】</p> <p>音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気を感じ取りながら、曲想や情景との関わりを理解して、よさや美しさを味わって聴いている。</p> <p>[ワークシート]</p>
第3時（本時）	<p>◇音楽の特徴や情景や背景を関わらせて理解し、作曲者の思いを感じ取って、根拠をもって批評し、鑑賞する</p> <p>○前時の学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Eとその前後の「ブルタバの流れ」を聴き、前時までの学習を想起する。 <p>○「ビシェフラト」を聴き、音楽の特徴や曲想を感じ取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気やイメージを感じ取り、言葉で表わす。 ・ビシェフラトの歴史について知る。 <p>○「ビシェフラト」から曲の終わりまでを、音楽の特徴や曲想と時代背景と関わらせて聴く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽を聴いて、気づいたことや感じたことをワークシートに記入する。 <p>○Eの前から曲の終わりまでを聴き、スメタナがなぜこの曲を作曲したのか、という発問に対してグループで意見交換する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スメタナがなぜこの曲を作曲したのかをグループで意見交換し、発表する。 <p>○Eの前から曲の終わりまでを聴く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クーベリック指揮 チェコ・フィルハーモニーの演奏を視聴する。 ・演奏を味わって鑑賞する。 ・演奏をCDで聴きながら、これまでの学習を振り返る。 ・スメタナが曲にこめた思いを考えて、「ブルタバ」のよさや美しさを、根拠をもって批評する。 	<p>評価の場面《IV》</p> <p>【鑑賞の能力②】</p> <p>音楽の特徴や情景と、時代背景を関連付けて理解し、作曲者の思いを感じ取って解釈したり、価値を考えたりして、根拠をもって批評し、鑑賞している。</p>



6. 本時の展開（第3時）

(1) 本時の目標

音楽の特徴や背景を関わらせて理解し、作曲者の思いを感じ取って、根拠をもって批評し、鑑賞する。

(2) 本時の使用教材

「ブルタバ」 教科書（2・3年 下） ワークシート

DVD 「プラハの春 音楽祭（1990年）」（クーベリック指揮 チェコ・フィルハーモニー管弦楽団演奏）

(3) 本時の学習展開

○指導内容（学習内容） ・学習活動	・教師のかかわり ◇評価 ◆評価方法
<p>○前時の学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Eとその前後の「ブルタバの流れ」を聴き、前時までの学習を想起する。 <p>○ G「ビシェフラト」の動機を聴き、音楽の特徴を知覚し、曲想を感じ取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気やイメージを感じ取り、言葉で表す。 ・ 音楽を聴いて、気づいたことや感じたことを個人でワークシートに記入する。 ・ ビシェフラトの歴史について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時までに聴いた音楽の流れや特徴、情景を思い出し、本時の学習に入っていくやすい環境をつくる。 ・ 前時で聴いたテーマⅢ（長調）に続く場面に、期待感をもてるようにする。 ・ 知覚・感受がしやすいよう音色 旋律 強弱 速度など鑑賞するポイントを指示する。 ・ 何人かの生徒に発表をさせ、意見を共有する。 ・ ビシェフラトについての資料、写真などを紹介し、歴史的背景も深まるよう、音楽の特徴とかかわらせて理解しやすいようにする。 ・ 出てきた意見に教師が共感し、生徒の学習への関心・意欲につなげる。
<p>音楽の特徴や背景をかかわらせて理解し、作曲者の思いを感じ取って、根拠をもって批評し、鑑賞する。</p>	
<p>○ Eの前から曲の終わりまでを聴き、「スメタナはなぜブルタバ川を描こうと思ったのか。」という発問に対しグループで意見交換する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ グループで意見交換をし、発表する。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>評価の場面《Ⅳ》</p> <p>◇Ⅳ―②音楽の特徴や情景と、時代背景を関連付けて理解し、作曲者の思いを感じ取って、解釈したり、価値を考えたりして、根拠をもって批評し、鑑賞している。</p> <p style="text-align: right;">◆ [ワークシート]</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽の特徴を知覚し、曲想を感じとるだけでなく、第2時で学習したチェコの歴史や、ビシェフラトの資料なども思い出して聴かせ、「なぜブルタバ川を描こうと思ったのか。」という発問に対し、意見をもつ手立てにする。 ・ グループで出た意見を、カードに書かせ掲示し、生徒の考えが形として残るようにする。

<p>○ 「E」聖ヨハネの急流」の前から曲の終わりまでを聴く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クーベリック指揮 チェコ・フィルハーモニーの演奏をDVDで視聴する。 ・演奏を味わって鑑賞する。 ・「音楽のもっている力」について、自分のことばでワークシートに記入させながら演奏をCDで聴く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際にコンサートホールで鑑賞している気持ちで聴くようにじっくりと味わって鑑賞するように助言する。 ・「ブルタバ」の学習を通じて自分が感じる、「音楽のもっている力」について考えさせる。
---	---

7. 評価について

(1) 評価の工夫

- ・音楽を形づくっている要素の働きや曲想、情景とのかかわりに対して、生徒の気づきが把握しやすいように、ワークシートを工夫した。〈評価の場面《I》《II》 ワークシート〉
- ・個で学習する時間と、話し合って互いの意見を聞きあう時間を設け、個人内での視野の広がりを記録できるようにした。

(2) 評価に関する資料

おおむね満足できると判断できる状況 (B) と判断するポイント

観点	評価 規準	〈評価方法〉 おおむね満足できる状況 (B) と判断するポイント
関心・ 意欲・ 態度 音楽への	①	<観察> 「ブルタバの流れ」を聴いて、情景との関わりを考える発言をしようとしているか。 評価の場面《I》
		<ワークシート> Eの前後の「ブルタバの流れ」を聴いて、音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）の変化を知覚し、曲想と関わらせて、ワークシートに記入しているか。 評価の場面《I》
	②	<観察><ワークシート> 「聖ヨハネの急流」の前後の場面を聴いて、音楽の特徴と時代背景を関わらせて理解し、作曲者の思いを考え発言しようとしているか。またワークシートに自分なりの言葉を使って書いているか。 評価の場面《III》
		<ワークシート> 「ビシェフラト」の動機を聴き、音楽の特徴と時代背景を関わらせて理解し、ワークシートに自分なりの言葉を使って書いているか。 評価の場面《III》
鑑賞の 能力	①	<ワークシート> 「聖ヨハネの急流」を聴いて、情景との関わりを理解し、音楽を形づくっている要素（音色 旋律 速度 強弱）のうち2つ以上を知覚し、ワークシートに記入しているか。 評価の場面《II》
	②	<ワークシート> 音楽にこめられたスメタナの思いを考えて、音楽の特徴や情景と、時代背景を関連付けて理解し、根拠をもって批評しているか。 評価の場面《IV》

(3)本時の評価（第3時）

評価の場面《IV》

◇評価規準

音楽の特徴や情景と、時代背景を関連付けて理解し、作曲者の思いを感じ取って、根拠をもって批評し、鑑賞している。〔ワークシート〕

○主な学習活動

「ブルタバ」の[E]の前から曲の最後までを聴き、「スメタナはなぜブルタバ川を描こうと思ったのか。」という発問に対し考え、ワークシートに記入する。

○〔ワークシート〕の「十分満足できる」状況（A）の具体例

これまで学習してきたことをもとに音楽の特徴や情景と時代背景を関連付けて理解し、「スメタナはなぜブルタバ川を描こうと思ったのか。」という発問に対し、自分のことばで批評することができている。

（例）「短調の暗い雰囲気から明るく希望に満ちた音楽に変わっていったことから、スメタナの愛する自然と、独立しようという、勇気と希望をチェコの国民に与えたかったから。」

○〔ワークシート〕の「努力を要する」状況（C）の生徒への対応

「ブルタバ」の音楽を形づくっている要素（音色・旋律・速度・強弱）の中から1つを知覚し、情景、時代背景との関わりが感じ取るように机間指導で助言するなどして、根拠をもって批評することができるように、学習活動全体を促す。

2. 研究授業の実際

(1) 授業準備

（公財）音楽鑑賞振興財団の協力により、電子黒板を使用することができ、生徒は正面を向いて大きな映像を見ることができた。そして、同じ映像を会場の側面にプロジェクターでスクリーンに投影し、参加されていた先生方も視聴しやすいように配慮した。また、授業がスムーズに進行できるように、視聴覚機器を操作する専属の教員を置いた。

(2) 導入場面

教師	前の時間で学習したテーマⅡから最後までを聴き、音楽の流れとともに、スメタナがどんな気持ちで作曲したのかを思い出してみよう。
生徒1	「[E]の場面で、当時のチェコの人々の苦しい気持ちを描いていると思いました。」
生徒2	「テーマⅢでは苦悩に負けずに、明るい未来を切り開いていこうという気持ちが伝わってきました。」
教師	「テーマⅢの後は、どのように音楽が展開していくのか、さらに先を聴いてみよう。」

(3) 展開場面

【本時の課題】音楽の特徴や背景をかかわらせて理解し、作曲者の思いを感じ取って、根拠をもって批評し、鑑賞する。

□の前から曲の終わりまでを聴き、曲想を感じ取るだけでなく、チェコやビシェフラトの歴史も関わらせて考え、「スメタナはなぜブルタバ川を描こうと思ったのか。」という発問に対しグループで意見交換する。

教師	「スメタナが描いたのは、なぜブルタバ川でなければならなかったのでしょうか。グループで意見を交換しあってみましょう。」
A班	「オーストリアからの支配から独立し、自分たちの国を作ろうという未来への希望を音楽に託した。」
B班	「国のシンボルを描くことで、国民に希望を捨てないようというメッセージを送った。 「チェコの象徴を描くことで、国の復興や平和を願った。」
C班	「当時のチェコの人々の思いや希望を投影するために作曲した。」
D班	「それぞれの班でいろいろな意見がでましたが、スメタナはブルタバの情景を表しただけは
教師	ないことが感じ取れましたね。」

(4) まとめの場面

教師	(クーベリック指揮、「プラハの春音楽祭」の演奏を視聴した後) 「音楽のもつ力とは何だと思いますか。考えてみましょう。」
生徒1	「聴いている人々に勇気や希望を与えるもの。」
生徒2	「ことばや国境を越えて、人々にメッセージを伝えることができる。」
生徒3	「前向きな気持ちにさせてくれたり、時には心を癒してくれたりする。」
教師	「人間は何か人に伝えたいことがある時、音楽というのは有効な表現方法になるのですね。」

(5) 研究討議

- 「ビシェフラト」の動機を聴き、音楽の要素を知覚し、曲想を感じ取る場面があった。その時「いろいろな楽器の音がした」という発言があり、これは「音色」に気づいたと受け止めるべきかと考えるが、どう授業者は考えているか。
 - 「色々な楽器」と答えられただけでも素晴らしい面があるので、そう答えたときの受け止め方が授業者としても大切になってくる。ただ、それだけで満足せず、繰り返し聴かせて、新たな気づきを引き出せるように授業を展開するよう今後とも研究を深めたい。
- 「なぜブルタバ川を音楽にしようとスメタナは考えたのか。」という授業のヤマ場に出される発問に、生徒がどう自分の考えや思いを発することができるか考えると、「ブルタバ」のクライマックスを迎える後半部分にしぼって鑑賞活動を進めたのは、指導者の意図や思いが集約した発問や授業展開になっていたのも、参考になった。
- 「スメタナはどうしてブルタバを描こうと思ったのか。」という発問では、答えがほとんど教科書に載ってしまっているので、「ブルタバをどう描くことで、チェコの存在意義を示したかったのか。」という発問にした方が、生徒からいろいろな答えが返ってきそうである。
- 曲の一部、特に後半しか授業で取り上げなかったが、そのことについてはどのように考えているのか。
 - 今回の授業は「ブルタバを教えること」ではなく、「ブルタバで何を教えるか」というところに重きを置いた結果このような授業展開になった。全曲を鑑賞できないというリスクについては今後の研究課題である。

- スメタナはなぜ「ブルタバ川を音楽で描こうと思ったのか」という批評文を生徒に求めていたが、Aの評価を与える例文は、どのようなものか。
 - これまで積み重ねてきた「音楽の要素についての知覚，感受を土台とし，作曲者の意図や思いと結びつけ総合的に言語表現を行っているもの」をより高い評価にしていくべきではないか，と考えるが，評価についてさらに研究を深めていきたい。

3. 指導助言より

指導助言者：奈良教育大学大学院教授・学長補佐 宮下 俊也 先生

音楽鑑賞教育を行うにあたっては、指導者は常に次のことがらと、それらの繋がりを考え、意識しておかなければならない。

- ① [共通事項]は何のために扱うのか。
 - ② 音楽の文化・歴史的背景の理解は何のために求めるのか。
 - ③ 音楽を批評する力は何のために求めるのか。
 - ④ 音楽を味わって聴くということはなぜ必要なのか。
 - ⑤ 鑑賞学習で身に付けた学力は生徒のその後の人生においてどのような能力として生きて働くのか。
-
- (1) 『ブルダバ』の特徴となる諸要素を知覚し、それらの働きが生み出す特徴や雰囲気を感じ受けること」は、本時の指導内容となる作曲家スメタナが曲に込めた思い、「ブルダバ」に対するチェコの人々の思い、「ブルダバ」を通して「音楽の持っている力とは何か」についての思考、に関連付けられており、それらの思考を活性化させるために機能していた。
 - (2) 「スメタナはなぜブルタバ川を音楽に表そうとしたのか、それによってスメタナは聴く人々に何を伝えようとしたのか」という問いに対する思考では、自分で考えをまとめながら、グループ学習で意見交換を行い、様々な捉え方を共有させていた。自分と異なる視点や判断した価値観についての意見を受け入れることは、自分の思いと他者の思いをつなげ、音楽の理解や味わい方を広げることへと発展する。しかし参観者の感想にもあったように、その問いに対する見解の一つはすでに教科書に示されており、それを超えた意見が出てこなかったことは残念であった。音楽史の中である程度定められた価値観が記載されている教科書を、いつどのように用いるかが課題である。
 - (3) 授業の終盤に「プラハの春音楽祭」の演奏を視聴させたことは、次の2点において意義があった。第1は、学びを振り返りながらじっくりと音楽を鑑賞させる点。第2は、音楽祭に集い楽しむ市民の姿も見られることから、「ブルダバ」に対するチェコの人々の思いを感じ取らせ、「音楽のもっている力とは何か」という問いを考えさせる材料として効果があった点である。ここで指導者が期待したことは、「人間は何かを伝えたい衝動にかられたとき、音楽によってそれを表現することができる。絵画や文学もその表現の手段であるが、音楽だからこそ伝えられるものもあり、それを鑑賞することは、表現者が伝えたいことを理解し、鑑賞者同士が感動をともなって共有することである」ということであった。

指導計画や授業内容にはまだまだ課題があるが、「音楽の力とは何か」を投げかけられたことは評価できる。「ブルダバ」はこれまで永く中学校鑑賞教材として扱われてきた。教材「ブルダバ」が最も効果を上げる指導内容は、情景描写や国民楽派の特徴の理解に留まるのではなく、それを通じたスメタナの理解、チェコ国民の理解、鑑賞する「私」（中学生自身）の理解であり、さらにはそれをも超えて、文化を築きその持続発展に貢献する「人間」というものの理解である。それが指導内容に反映された時、はじめて中学校音楽鑑賞学習として「ブルダバ」を教材として取り上げる意義が見えてくる。

4. 研究の経緯

鑑賞領域では、全日音研に向けて研究をスタートするにあたり、研究の方向性を定めるため、研修会をもった。今から考えると恥ずかしい話であるが、教師から一方的に音楽を聴かせ、作曲者の名前、音楽の内容・形式などを知識として教え、最後に感想を書かせるという鑑賞授業を多くの教師が行っていた。そこから脱却する方法を模索することから研究が始まった。

まず、「音楽を知覚する活動」と「音楽を感受する活動」を整理すること、「音楽を形づくっている要素が曲想とどのように関わっているか」「音楽を形づくっている要素とそれらが生み出す曲想を、自分のことばで表し、音楽を批評する。」ということ、授業の中でどのように展開させていくかをテーマに、研究をはじめた。

平成23年11月、まず題材を「心境の変化と音楽のかかわりを探ろう」とし、「魔王」を教材に、第1学年で行った。登場人物ごとに音楽を聴き、音楽と心情の変化がどのように結びついているかを考える授業であった。反省として、音楽を感受する活動が知覚する活動よりも優先されてしまったこと、人数の多さと役割分担がはっきりしていなかったことで、グループ活動がうまく機能しなかったことが挙げられた。しかし、「音楽を形づくっている要素が、曲想とどのように関わっているか」というアプローチは、研究として進める価値があると判断した。全日音研は6月実施であるため、1年生の授業の実施は難しいと考え、2、3年生で取り扱う楽曲の中から、情景や心情を音楽で表した「ブルタバ（モルダウ）」を教材として取り扱うこととした。

平成24年3月、題材を「音楽の要素を感じ取り、情景と結びつけて味わおう」とし、2年生を対象に「ブルタバ」を教材として授業を行った。知覚・感受したことを手がかりに、ブルタバ川の情景と結びつけるところまではたどり着いたが、グループ活動で取り上げた場面が多すぎたため、他グループの活動の様子を互いに理解するまでに至らず、場面の数をもっと絞り込む必要があることが解った。また、各班に1台ずつラジカセを与え、それぞれの班が違う場面の音楽を聴いていたため、音楽室内に響く音が混在し、生徒が落ち着いて音楽を聴き取ることができなかった。このことから、音楽を一斉に流し、それを聴きながらグループ活動を行う工夫が必要であることが明らかになった。また、作曲者の思いに踏み込んだり、自分のことばで鑑賞した音楽の批評をしたりするところまでは進展していなかったことなど、数々の課題が残ることとなった。

同年6月、3年生を対象に「ブルタバ」の研究授業を行った。音楽の要素と情景を結びつけるために、ブルタバ川やチェコの町並みの写真を用意したが、視覚に頼ることで、本来は知覚・感受したことをもとに情景を思い浮かべるといった学習が損なわれるという結果となり、再考を余儀なくされた。また、どのような発問をするか、生徒の意見をどう引き出すか、グループ活動をどのように位置づけるかに課題が残ることとなった。さらに、前回から場面を減らしたものの、まだ時間が足らず、場面をさらに精査する必要があることが解った。

同年8月、場面を「ブルタバの主題」「月光に照らされる夜のブルタバ」「聖ヨハネの急流」に絞り、写真は使用せず、発問もさらに検討を加えて、音楽科教員を対象に模擬授業を行った。一斉に音楽を聴かせ、知覚・感受したことと情景を関わらせて、気づいたことを発表する授業に変えて行ったが、授業内にすべての場面の振り返りができず、とりとめのない授業となってしまった。参加者からは、ワークシートに記入する時間や、グループで意見を出しあい、学びを深める時間などを再考する必要があるのではないかという意見が出た。また発表方法にも新たな課題が見つかった。

12月には、年の瀬にも関わらず、全日音研兵庫大会で指導助言を頂くこととなった、奈良教育大学教育大学院教授・学長補佐 宮下俊也先生に時間を頂くことができた。その時点での指導案は、受動的な授業のスタイルから抜け出せておらず、「ブルタバ」を教える授業に終始していて、なかなか「ブルタバ」で教える指導案に至っていなかった。また、知覚や感受はあっても、それを思考・判断する学習活動に結びつけられず、何を足がかりにすればよいかさえ、混沌として解らない状況であった。迷走する指導案のコンセプトに対し、次のような助言を頂いた。

- 鑑賞の学習が生徒の能動的な活動でなければならないこと
- 「ブルタバ」を教えるのではなく、「ブルタバ」で何を教えるのかをよく考えること
- 「ブルタバ」1曲を分析して終わるのではなく、国民楽派の音楽について考える等、発展させることができないか。
- 生徒たちにもあるふるさとや母国を思う気持ちを、アイデンティティと結びつけて喚起し、チェコの人たちの思いとの接点を考えさせ、スメタナの思いに迫るような授業展開を考えること。

また、これからの鑑賞授業は、ベーシックレベル（諸要素の知覚・感受）、ミドルレベル（批評・音楽を愛好する心情・感性の育成）にとどまらず、持続可能な社会・未来を形成するために行動できる力を育むアドバンスレベルが求められるのだということを教えていただいた。「ブルタバ」でアドバンスレベルまで到達できるよう、どの方向に舵を取るのかが、課題でもあり、混沌とした状況から抜け出すヒントともなった。

この助言を受け、あらためて「なぜブルタバなのか」という点に立ち返り、3年生で鑑賞活動のまとめとしてどのように取り組めばよいかを考えることになった。今までは、音楽を聴いて知覚し、感受したことがらを、情景や作者の思いと結びつけることで終わっていた。それを、生徒の思いと重ね合わせ、さらにその先を考えさせる。その先にあるものは何なのか。なかなか考えがまとまらず、時間だけが過ぎていった。ただ、今までの作者の思いや情景を考えさせる場面の公開ではなく、まとめの授業を見ていただきたいという思いが強くなっていった。

平成25年2月、新たな指導案で、3年生を対象に「ブルタバ」の授業を行ったが、十分に授業内容を整理できない状態での授業となり、先を急いでしまったために、思考の過程の次のレベルには至らなかった。本来であれば、指導案が完成しているべき時期にあって、まだ方向が定まらないことに焦りと不安が募った。その状態は5月まで続いた。

5月下旬に文部科学省教科調査官 大熊信彦先生に指導案を見ていただく最後の機会があったが、その時点でもまだ指導案は完成していなかった。大熊信彦先生からは、評価について整理をすることと、4時間配当を3時間配当にし、授業者のイメージができて第2時を公開してはどうかという助言を頂いた。確かに第3時となる、アドバンスレベルにつながる授業はこの時点でほとんど見えていなかった。ただ、当時の人々を動かし、今もチェコの人々の心の中に生き続ける「ブルタバ」の魅力について考えるようになっていた。こうして、大会誌原稿の校了後も、指導案の検討は続いた。

6月になり、全日音研兵庫大会で公開授業を行う学校で、研究授業の先行実施を行った。ここでは、グループ学習の手法、視聴覚機器を使用しているときの時間のロス、「知覚・感受」の学習の深め方、ワークシートの内容など課題が見つかった。

6月14日、どのグループも当日の資料作成に奔走している大会1週間前に、都合のつく幹事が集まり模擬授業を行った。「なぜスメタナはこの時期にブルタバを描こうと思ったのか。」などという発問でも迫ってみたが、生徒が自分の生き方や考え方と照らし合わせるまでには至らなかった。「持続可能な社会・未来を形成するために行動できる力とは」と話し合っていたところ、「音楽のもつ力は何だろうか。」という発問をすれば、授業を受ける子どもたちが能動的に考える時間を設けることができるのではないかという提案が出てきた。しめくくりの発問が見え、「プラハの春音楽祭」の映像がいつそう意義あるものになった。

かくして指導案はようやく完成し、6月20日を迎えることとなった。

当日は、(公財)音楽鑑賞振興財団の技術協力もいただき、生徒が見る電子黒板を使った大型画面と、プロジェクターを使い、会場であった体育館の舞台に大型画面を映し出したことで視覚に訴える効果が出た。

(公財)音楽鑑賞振興財団からは、研究を行った1年半、電子黒板を借用することができ、授業でデジタル教科書とともに使いながら研究をすすめることができた。鑑賞の授業では、視聴覚教材が大画面で見ることが

できるだけでなく、聴かせたい箇所のメロディーだけを強調し、画面で楽譜を見せながら聴かせることもでき、AV 機器やコンピュータとつないで多様な展開が可能であることが解った。また、鑑賞だけでなく、表現領域でも授業をわかりやすく進められる工夫が数多くあり、さらに研鑽を積みばもっと多様な利用方法があることを感じた。

鑑賞領域研究の記録

月 日	種別	内容
平成23年度		
6 / 17	研究会	全日音研に向けての鑑賞領域の研究の方向性を確認する。
10 / 4	指導案検討会	本山中学校で水谷教諭が行う指導案検討会を行った。
11 / 11	研究授業	本山中学校で水谷教諭が研究授業を行った。
2 / 20	指導案検討会	垂水東中学校で寿教諭が行う研究授業の指導案検討会を行った。
3 / 13	研究授業	垂水東中学校で寿 哲志教諭による授業が行われた。
平成24年度		
6 / 7	指導案検討会	西神中学校で指導案検討会を行った。
6 / 21	研究授業	西神中学校で小柳教諭が研究授業を行った。
8 / 30	模擬授業	鷹匠中学校で寿教諭が模擬授業を行った。
12 / 11	指導助言	垂水東中学校で宮下教授にお出で頂き、授業内容について検討した。
12 / 29	指導助言	宮下教授より、指導の方向性について示唆を頂く。
2 / 15	指導案検討会	福田中学校で濱田教諭が行う研究授業の指導案検討会を行った。
2 / 18	研究授業	有馬中学校で濱田教諭が研究授業を行う
2 / 26	指導助言	歌敷山中学校で大熊信彦先生より授業内容・時数について指導助言を頂く。
平成25年度		
5 / 13	指導助言	奈良教育大学宮下教授から指導案について指導助言を頂く。
5 / 21	指導案検討会	垂水東中学校で指導案検討会を行う。
5 / 27	指導助言	竜が台中学校において大熊文科省調査官より指導助言を頂く
6 / 6	研究授業	垂水東中学校で寿教諭が「ブルタバ (モルダウ)」の研究授業を行う。
6 / 14	模擬授業	垂水東中学校で寿教諭が「ブルタバ (モルダウ)」の模擬授業を行い、他領域の先生方も多数来ていただく。
6 / 20	全日音研	湊翔楠中学校で全日音研の研究授業が行われる。

5. 成果と課題

曲を聴かせて感想を書かせるだけであったり、映像に頼ったりする受け身の鑑賞の授業から、生徒が主体的に鑑賞するためには、授業の展開をどのようにすればいいか、発想の転換が求められた。研究をし始めた頃は、かつての授業展開からなかなか抜け出すことができなかったが、音楽の諸要素を知覚させ、感受する授業展開をしていくと、これまで消極的だった生徒が発言をし、グループ学習によって授業の雰囲気活性化するといった変化がみられた。また、知覚・感受の相互関係を学び、歴史的背景や作曲者の思いに迫っただけでなく、音楽のもつ力について考える授業展開ができたことは、アドバンスレベルに少し手が掛かったようで、大きな手応えとなった。ワークシートの作成、授業内での生徒観察、客観的な評価規準の設定など、さらに研究を深めていきたい。



題材名 歌舞伎のよさや美しさを味わおう～長唄の歌唱を通して～

教材名 長唄「勸進帳」歌舞伎「勸進帳」

1. 研究の概要

我が国の伝統的な歌唱の充実が学習指導要領で示され、それを受けて本領域では、誰でもできる伝統的な歌唱の指導法を模索した。手がかりを求めて、能や歌舞伎の公演に出かけたり、謡や長唄の講習会にも足を運んだりした。そこで、今回は長唄の歌唱を通して歌舞伎のよさや美しさを味わわせることをねらいとした。当初、長唄は口伝であるのでまねることから始めたが、生徒の主体的な活動に迫るのは難しかった。その中で長唄の特徴を知覚・感受し言葉の特性を生かして唄うことを考えた。長唄を唄うときの姿勢や所作を体験したり、長唄や歌舞伎がどのように伝えられてきたかを学んだりすることで、日本の伝統文化への理解を深めていくとも考えた。

また、長唄の特徴を知覚・感受し、表現活動を行うために必要な力を発声・発音などの唄い方とし、言葉の特性を生かして創意工夫する過程で身に付けさせる。加えて、歌舞伎音楽を歌舞伎の舞踊や演劇と関連付けながら味わって鑑賞することで、そのよさや美しさを、根拠を持って言葉で表す力を付けさせる。このように表現活動と鑑賞活動を相互に学習することが、知覚・感受する力を伸ばし、より深く思考してふさわしい表現で唄ったり、自分なりに価値判断をしながら味わって聴いたりする力につなげていくと考えた。

【題材の指導内容】全5時間

時	学習活動（生徒の活動）	評価	指導（指導内容・指導のねらい）
1	「寄せの合方」「これやこの～やまかくす」の部分 を聴き、歌舞伎音楽の特徴を意識し、曲想を感じ取 って、長唄の部分唄う。	I ①	歌舞伎音楽の特徴に関心を持ち、主体的 に鑑賞したり、歌唱したりさせる。
2	長唄の特徴を知覚して唄う。	I ②	長唄の特徴（音色・節回し・産字・など）や言 葉の特性を生かして唄わせる。
3	グループで「おうさかのやまかくす」の唄い 方を工夫する。	II ①	長唄の特徴や言葉の特性を生かして音 楽表現を工夫させる。
4	長唄の特徴や言葉の特性を生かしてグルー プで発表する。	II ① III ①	長唄の特性や言葉の特性を生かして音 楽表現をするのにふさわしい技能を身 につけて発表させる。
5	歌舞伎音楽の特徴を舞踊や演技と関連付け て理解し、歌舞伎のよさや美しさを自分なり の言葉で紹介文を書く。	I ③ IV ①	歌舞伎音楽の特徴を舞踊や演劇と関連 付けて理解し、よさや美しさを味わわせ る。

2. 研究授業の実際

(1) 授業準備

- ・どんな点に気を付けて発表するのか長唄の特徴となるキーワード（音色・節回し・産字・唄尻・間・ハル・ノム）と発表の手順をホワイトボードに示した。
- ・日本文化を体感できるように畳、見台、手作り白扇、座布団を準備した。

(2) 導入場面

教師	前回までに、長唄の特徴や言葉の特性を生かして、思いや気持ちを伝えるように練習してきたね。今日は、大きな声ではっきりと発表することを基本にして、ハル・ノム・産字・声の出し方・間などにも気をつけ練習してみましょう。
----	---

(3) 展開場面

【本時の課題】長唄の特徴や言葉の特性を生かして音楽表現する。

- ・生徒が表現しようとした思いや気持ちを、長唄の特徴や言葉の特性を用いて表現を工夫して発表する。
- また、他の班の発表を聴き、表現の工夫を聴き取る。

生徒 1	悲しくてさびしい様子を表します< 5 班の発表 >
教師	他の班でよく工夫されていたなと思った点を発表しましょう。
生徒 2	7 班で激しく逃げるようすを節回しで表現しているのがよくわかった。
生徒 3	9 班は戻れない悲しみを、産字を長く伸ばしていることで表している。
教師	悲しくて、さびしく名残惜しい様子を、音を高くして表していたので、もう一度聴いてみましょう。< 5 班発表 >
教師	どうでしたか。緊張して、声を遠くに飛ばすことや、産字を伸ばすところがうまくいってない班が多かったね。でも、特徴である節回しや声をハルところがうまくいっていました。

(4) まとめの場面

教師	2 種類のプロの演奏を聴いて、それぞれの表現の違いや自分たちと比べてみての違いを聴いてみましょう。< 鑑賞 >
教師	それぞれの演奏はどうでしたか。
生徒 1	ひとつ目の演奏はひとつひとつの言葉がよく伸びていて、言葉が力強く誰かに訴えている感じがしました。
生徒 2	2 番目の演奏はテンポが速くて、細やかな節回しが多かった。
生徒 3	ハッていなくて、おしとやかな感じがした。
教師	プロの人もいろいろな表現がありました。みんなも、自分の気持ちや思いを伝えるために、いろいろな工夫をすることができました。

演奏者によって、表現に違いがあつてよいことをまともとしながら、次回の授業で、音楽に焦点をあて歌舞伎を視聴することを予告し終了した。

3. 参観者の声（研究討議での質問と応答・アンケートの内容も含める）

- 長唄を教えるにあたって、ゲストティーチャーによる指導はあつたのか？
→ゲストティーチャー制度は活用せず、講習会や長唄教室で教師が学んだ。
- 資料に先行授業のワークシートがあり、生徒の活動がよく分かり、良かった。
- 伴奏楽器を使わずに発表をしていたが、その選択をした経緯を教えてください。
→CDで三味線伴奏を流してのグループ練習は、教室の広さなどを考えると難しい。授業者が三味線を弾いて伴奏をするのも、弾けることが前提となるので、最終的に無伴奏（楽器の代わりにひざで拍子を取ること）とした。
- 授業の終盤に生徒が2種類の演奏を聴き比べていたが、次時は鑑賞中心の授業ということで、このタイミングでの聴き比べはどのような意図で行つたのか。
→生徒は工夫をする過程で、自分たちの表現が正しいのかという思いを持つようになる。プロの演奏を聴くことにより、様々な表現が認められるのだという確認をさせるために行つた活動である。

4. 指導助言者の指導内容 《熊本市教育委員会 上野 正道主事のご指導より》

➤ 教師は「子どもたちがひとり立ちできる」授業をすべきである。そのためには生徒に考えさせる時間を確保することが必要である。題材の計画や授業の計画を次の3つに整理して取り組めばどうか。①**教師が教える場面**では、教師が時間をかけすぎて受け身の生徒をつくらないように、言葉を整理し、教材教具の提示を工夫するなど生徒が関心意欲をもつ魅力的な時間にする。②**仲間と考える場面**では、時間をとり、その際、音楽表現や鑑賞の授業を充実するために仲間と共に自分なりの意図や価値を述べ合う場面が必要である。③**ひとりで学ぶ場面**では、言語活動の充実が求められ、話し合い、伝え合い等、「合い」のある授業は増えたが、グループ活動だけで終わってしまっている学習もある。求めている力が確実に身に付いているか、最後はひとりで学ぶ力を確実に獲得させる場面が必要である。このことは大会主題の個に還ることにもつながる内容である。

➤ 音楽に即した言語活動の充実に取り組むための4つのステップを紹介しておく。

①**題材でつきたい力を見極める**

②**つきたい力に最適な言語活動を選ぶ**

③**生徒が課題を解決、追求する過程のなかで適切に場の設定をする**

④**その際に、思考や判断を促す発問や指示を具体化する**

音楽における言語活動は、音楽活動を通して行うことが大切である。音楽に関する言葉と音楽とが行き来し、より充実したものになる。節回しなどを口ずさんだり、聴きあったりして、意見を交換したり、楽譜に書き込んだりと音楽を通して行う。音や音楽の世界を他者と伝え合うことは、感動的で楽しいもの。音楽への関心と意欲を高めつつ、音楽表現を工夫する術や味わう術を身に付けさせていけばよいと思う。

➤ 本題材を扱う留意点として、①**どこを扱うか**ということが大切である。生徒が歌詞の内容を理解して学習する場面など、学習効果が上がり、つたない演奏でも教師がともに生徒とできる場面を選ぶとよい。②**どのように教材の提示をしていくか**ということも重要である。今回の授業でも、横の楽譜とともに縦の楽譜を使うとより効果的である。縦譜を扱うと、歴史的かなづかいが使われていることや、唄と三味線がずれているなどの「つかず離れずの関係」がわかってくる。ワークシートは、学習の流れがわかるように工夫するとよい。また学習が終わった時に、学習の過程を振り返ることができるようなワークシートの仕立てになればと思う。③**批評文の書かせ方の工夫**として、キーワードを示して書かせた生徒のワークシートを見ると、細やかな情緒や感性が読み取れた。枠だけでなく、量を吟味して設定し、整理をして書かせることも大切だ。

➤ 伝統音楽を指導するにあたって、教師自らが飛び込み、本質に近づいていくことが大切である。また、音楽の授業を通して、生徒の心に人との関わりや音楽を感じる心が同心円状に広がることを願っている。

5. 成果と課題

長唄「勸進帳」の学習を通して、生徒が長唄の歌唱を学んだことにより、他の歌唱とは違う音楽であることや、音楽と様々な要素との関わりを捉えられるようになった。音楽の特徴を感じ取ることを窓口として、共通事項の学習を支えとし、自分なりの思いや意図を持ち、創意工夫をして歌唱の技能を伸ばし、音楽表現をすることや、音楽を聴いて解釈を深め、自分なりに価値を考え、言葉で表すなどして音楽のよさや美しさを味わうことができた。音楽に対する価値意識を広げ、歌舞伎音楽における文化の豊かさに気づき、尊重していくことにつながった。そのことが伝統文化を愛好する心を育てる糸口となった。

今回、私たちにとって伝統音楽と正面から向き合ったことは、題材の本質に近づき、教材の魅力を発見することにつながり、大きな成果となった。我が国の伝統音楽は特別なものではなく、指導者が敬遠しがちであったことを反省せざるを得ない。今後、3年間の学習指導計画で、学年の目標に応じた伝統音楽の指導をさらに充実させていくことが課題である。そのために、伝統音楽だけではなく他の分野との関連や題材の設定、魅力ある教材選択、時間配分の工夫などを研究していくことが必要であると考えます。

(公財) 音楽鑑賞振興財団からの助成を受け、全国大会に向けて授業研究を行うにあたり、電子黒板、及び電子教科書を本校音楽科の授業で使用する機会を与えられた。まだまだ未熟ではあるが、私なりに試行錯誤をした結果、授業の進行上効果的であった点をまとめた。

(1) 教材の細かな部分を任意で提示する

「主人は冷たい土の中に」で曲の形式を教える際に、毎回メロディーが終始するか、しないか、を考えさせ、そこから曲のまとまりを感じさせるのに苦労していた。また読譜が苦手な生徒にとっては、楽譜の歌唱パートだけを映し出し、階名が見え隠れできるようにして読譜の練習ができる。また大画面であることから、メロディーを確認しながら電子音で流すことができ、細かなメロディーの違いを聴き取らせることが容易になった。「二部形式」を学ぶ場面でも、旋律の〈つながる感じ〉〈終わる感じ〉を聴き分ける時は、目と耳で同時に知覚できることから、生徒にとっての分かりやすさにつながった。二部形式の成り立ちを知った生徒は、旋律の特徴を生かしながら、フレーズの終わりの音をていねいに歌ったり、曲想を変えて盛り上げて歌ったりするなど、表現の工夫に結びつけていた。また、アルトリコーダー演奏のための副旋律が載せられているが、電子教科書を活用すると、画面に楽譜と同時進行でアルトリコーダーの運指図が映し出され、リコーダーの苦手な生徒でも、これを見ながら練習ができるようになっている。映像を大きく映すだけでなく、教える側のねらいに合わせて、分かりやすく教材を提示するために、電子黒板はたいへん有効であると感じた。

(2) 音楽の流れを視覚化する

4分の3拍子と8分の6拍子、4分の4拍子と2分の2拍子の違いを学ぶ時、板書や説明では、理解させにくい場面がある。

「夢の世界を」を第2学年で扱う時、8分の6拍子というリズム感覚を生徒に伝えることが難しいと感じていた。しかし、電子教科書や電子黒板を使うと、楽譜が音楽の流れと同時に画面に出てくるため、基準となる8分音符1小節間に6拍カウントされることが分かりやすく伝えられる。その結果、8分の6拍子のもつ特有のフレーズ感を生かし、リズム感のある良い表現に結びつけることも考えられるようになった。

「花の季節」の前半部は2分の2拍子である。ここでも4分の4拍子とは違った流れを感じることができたようで、歌唱表現に生かすことができた。また、この曲は速度の変化を生かした表現をしたい曲である。速度の変化を学ぶ際、楽譜にメトロノーム機能がついているため、曲のイメージや生徒の歌唱の技量に応じた速度の設定が可能であり、より明確に速度の変化を感じ取らせることができた。

(3) 資料を提示する

管弦楽曲の鑑賞の授業では、合奏の部分であっても特定の楽器を取り上げて、楽譜を見ながら音楽を確認することができる。また楽譜の一部や地図など、さまざまな画像を提示することもできる。さらに、タッチペンで電子黒板の画面に記入したり、プレゼンテーションソフトと併せて使用したりすることも可能であり、多様な展開が考えられる。

これからの音楽教育は、さまざまな視聴覚機器を活用し、生徒が自ら気づく学習活動を創り出していくことが大切であると考えていたので、この度、電子黒板を使用する機会を得て、とても貴重な体験となった。

VI. 研究の成果と課題

1. 鑑賞教育で育成したい力の明確化

現行の学習指導要領が実施されると時期を同じくして、神中音研の研究が始まった。学習指導要領の改訂により、評価の観点は「音楽への意欲・関心・態度」「鑑賞の能力」となり、思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、記録、要約、説明、論述といった学習活動に各教科で取り組むこととされた。

鑑賞領域の学習においては、「言葉で説明する」、「根拠をもって批評する」などして音楽のよさや美しさを味わうこととし、音楽の構造などを根拠として述べて、感じ取ったことや考えたことなどを、ことばを用いて表す主体的な活動が重視されることとなった。加えて、音楽を形づくっている要素や要素同士との関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受すること、音楽に関する用語や記号などについて音楽活動を通して理解することが〔共通事項〕として示された。

それまでの鑑賞の授業における感想文の評価が国語力により左右されることを懸念する声は払拭され、自分の考えを、ことばを用いて適切に表すことも、学力のひとつと考えられることとなった。また、感想文ではなく、音楽を鑑賞して聴き取ったことや感じ取ったことをもとに、価値を見だし、自分なりに解釈した音楽のよさや美しさを批評文として表すことが提示された。

そこで、鑑賞グループは、鑑賞の学習が主体的な活動となり、生徒が〔共通事項〕を手がかりに、音楽を形づくっている要素を聴きとり、それらが生み出す曲想と作者の思いや表現されている情景、また歴史的背景や他の文化との関わりなどを関わらせて、音楽のよさや美しさを自分なりに解釈し、味わって聴くことができるようになることを、鑑賞領域の目標とした。

これにより育成すべき力が具体的に見えてきた。

まずは、音楽を形づくっている要素を聴き取る力である。

長調と短調を聴き分けたり、速度や強弱の変化を聴き取ったりすることがこれにあたる。この時〔共通事項〕が大きな手がかりとなった。本研究会では、音楽を形づくっている要素を一覧にまとめ、主たる鑑賞教材だけでなく、参考曲の視聴や歌唱や器楽の表現活動に於いても、繰り返し意識するように学習計画を立て、また実践してきた。1年時より継続して〔共通事項〕を意識させ、音楽を形づくっている要素を聴き取る学習活動を積み重ねることで、生徒の聴き方が変わり、より繊細なことがらにも気づくようになる。また、小集団で気づきについて話し合い理解を深める活動が、自分が知覚していなかったことに気づき、学びを共有できる点で有効であった。また課題であった「音楽用語の定着」にも効果があった。

つぎに、知覚したことと感受したことを関わらせて考える力である。

「魔王」の学習において、「始まりの音がだんだん高くなっているのでよりおそろしい雰囲気になっている」、「ブルタバ」の学習で「ティンパニや金管楽器が加わり、音量が増え、短調で演奏されているので、荒々しく混沌とした雰囲気になっている」というように、音楽を形づくっている要素やそれらの変化が生み出す曲想を感じ取り、それらを関わらせる力である。感受する活動を先にするか、知覚する活動を先にするか、研究会では論点のひとつとなった。同じ教材を使って検証をしたところ、知覚を優先させると分析に終始し、感じ取る部分が希薄になる傾向が見られた。また、感受を優先させると、感受したことから結びつけて音楽を形づくっている要素を導き出す傾向が見られた。これは、感受したことと知覚したことを関わらせるという点で課題がある。そこで、まず1次的に感受する活動を行った後知覚し、さらに深い感受に導くというかたちが良いのではないかという結論に至った。

さらに、思考・判断する力である。

音楽の特徴とその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて鑑賞したり、解釈したり価値を考えたりして音楽のよさや美しさを味わったりするためには、知覚・感受したことを根拠として、音楽で表現されている情景や、作者の思いや意図を考える力が必要となる。この過程を加える事で、生徒の鑑賞に対す

る意識は大いに高まった。今まで聴き取っていなかったことを聴き取れるようになる。今まで感じなかったことを感じるようになる。今まで気づかなかったことに気づく。このような変化が生徒に表れた。生徒たちは、音楽の聴き方が変わったことにより、音楽の世界が広がり、もっと聴きたい、もっといろいろな音楽に触れたいと考えるようになった。また、思考・判断して味わって聴く学習活動を積み重ねていくことにより、よさや美しさを解釈するだけでなく、音楽とどうか関わっていきたいかを考えるようになった。

ブルタバを鑑賞した生徒の批評文を紹介する。第3学年3学期の授業である。

ブルタバを聴いて、音楽というのは自分の思いを強く主張するだけでなく、その曲を聴いた人の心を大きく動かすことのできるすごい力を持っているのだと感じました。

この曲では、作曲者スメタナの祖国を愛する気持ちが音楽にすごく表れていて、それを聴いた人たちもスメタナの思いを感じ取って民族意識が高まったのだと思うので、音楽はすごいと思いました。その曲を聴くだけで、いろいろな情景が思い浮かび、感情が湧いてきます。私たちが話しているのと同様に、作曲者にとって音楽は自分の思いや感情を表すことのできる大切なものなのだと思います。私もこれからもっと音楽に関わり、たくさんの作曲家の心に触れていきたいと思います。

私にとって音楽は勇気を与えてくれる存在です。それはどの時代でも同じなのだと思います。支配から逃れるための勇気、自分たちの誇りを守る勇気、生きる勇気も与えてくれます。スメタナが作曲した「我が祖国」はチェコの人にとってそんな勇気を与えてくれる音楽なのだと思います。だから130年経った今でも大切にされているのでしょう。

私は、音楽は自由でなければならないと思います。スメタナやシベリウスも様々な規制のある中、祖国を取り戻したいという思いで音楽を作ったのではないのでしょうか。今、平和な日本で生きる私たちには想像もつかない痛み、苦しみ、嘆き、そして誇りや勇気が込められているのだと思います。私には、この「ブルタバ」に傷だらけでも立ち上がる人が川の流れてに沿ってチェコの誇りを熱く語り、最終的には遠ざかるブルタバ川に祖国を取り戻す決意を誓う姿が思い浮かびます。

私はどの時代においても、音楽には作曲者の誇りが込められていると思います。それをどれほど深く感じられるかは聴く側次第だと思うので、音楽を深く感じられる人になりたいと思います。

最後に、ことばで表す力である。

神中音研では全国大会兵庫大会に向けて小集団による学習形態を実践してきた。

まず、神戸大学附属中等教育学校 森瀬智子教諭のご尽力で、同志社女子大学 大黒孝文特認教授をお招きして、協同学習について講演していただいた。その後各グループで、男女混合や男女別、4人組や6人組など、様々な携帯で実践をした結果、4人の男女混合グループが最も学習効果があるのではないかという結論に達した。題材や学校の事情もあり、男女別にするか男女混合にするかについては学校に一任するとしたが、小集団は4人1組にすることとした。

小集団による学習を通じてコミュニケーション能力が高まり、一人に一役、役割を与えることで、活発に、ねらいに沿った活動ができるように変化した。また、自分と違った気づきを知ることにより思考の範囲が広がったり、教え愛の場面が増え理解が深まったりした。

鑑賞教育で育成したい力を明確にし、指導の実際の実践内容を共通理解することにより、鑑賞の授業の伝え方が変化し、理解が深まった。

2. 評価の改善

鑑賞教育でつきたい力が明確になったことで、評価に対する理解も深まった。授業の中で、具体的に何を知覚し、どのように感受しているかなどの生徒の鑑賞の力を知りたいと考えるようになった。生徒につきたい力は、授業を終えて教師が確認したい力と結びついた。ところが、教師が求めるような知覚や感受の記述がないことも少なくなかった。それは我々の授業の手法に課題があった。生徒が答えやすい発問ができているか、学習の過程が見えるワークシートになっているか、生徒に最も適切な教材を、適切なタイミングで提示できているか、模擬授業や研究授業を重ねながら模索した。研究会では、新しいものを付け加える検討ではなく、無駄を削ぎ落としていく検討により多くの時間を割くことになった。

「魔王」「勸進帳」「ブルタバ」などの様々な鑑賞教材に取り組んできたが、共通していたことは聴かせるポイントを絞り、どのような力をつけたくて、なぜその部分を聴かせるのかを明瞭にする工夫を行ったことである。また、「個で学び、集団で学び、個に還る」という中学校部会テーマの副題にあるように、個人で考えたことを、グループで共有しながら学習を深め、最後はもう一度自分で考える流れの中で、全員で学習を深めるためには、教材のどの部分に力点を置くかも大切なポイントだと感じた。

評価をするにあたって、まず基本的な評価の考え方を共通理解する必要があった。基本的な考え方の根拠は、「評価規準作成のための参考資料」（国立教育政策研究所 教育課程研究センター H22.11 発行）にある。同資料の、評価規準に盛り込むべき事項と評価規準の設定例を参考にしながら、題材のねらいにあった評価をするためにどうすればよいかという検討を何度も行った。全国大会を終えた今、少しは理解が深まったと思うが、「何で、何を、どのように、どの場面で評価するか」について、まだまだ道半ばである。

【「B鑑賞」の評価規準に盛り込むべき事項】

第1学年	
音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを、音楽の特徴とその背景となる文化・歴史や他の芸術との関連、我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴、音楽の多様性に興味をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりを感じ取る、音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付け、我が国の郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取るなどして、解釈したり価値を考えたりし、言葉で説明するなどして、多様な音楽のよさや美しさを味わって聴いている。
第2学年および第3学年	
音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わり、音楽の特徴とその背景となる文化・歴史や他の芸術との関連、我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴、音楽の多様性などに関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解する、音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解する、我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解するなどして、解釈したり価値を考えたりし、根拠をもって批評するなどして多様な音楽のよさや美しさを味わって聴いている。

「評価規準作成のための参考資料」（国立教育政策研究所 教育課程研究センターH22.11 発行）より

3. 見えてきた課題

① 表現領域の題材との題材構成

鑑賞領域内での題材構成は見えてきたが、表現領域の題材とどう組み合わせることが効果的であるのか、さらに研究が必要である。効果的な題材構成を行えば、表現領域の学習で学んだことが鑑賞活動に生き、また鑑賞の学習で学んだことが、表現に反映されるのではないかと考える。歌唱・器楽・創作の表現活動と鑑賞の学習をどう組み合わせるかは、これからぜひ取り組みたい課題でもある。

② ワークシートの研究と発問の工夫

題材のねらいや教材の特徴に合わせて、生徒が学習の過程が理解しやすく、取り組みやすいワークシートの作成は、まだまだ研究の余地がある。また、指導のねらいに合った思考をするための発問も大切である。生徒が考え込んで、なかなか答えられないような発問は避けたいものだ。そのためには、何をねらいに尋ねているのかを明確に示すことができ、生徒が進んで考えたり相談したりできるような発問を考える必要がある。

③ 語彙の定着と表現力の伸長

生徒が感じ取ったり考えたりしたことを、根拠をもって表すために、語彙の豊富な生徒を育てていくことが必要である。音楽を形づくっている要素を表すことだけでなく、豊かな表現力でコミュニケーションが取れることは、表現活動にもつながると思われる。

④ 「持続可能な開発のための教育（ESD）」を視野に入れた題材の研究

音楽を鑑賞する学習には、ESDの考え方を組み入れた多様な展開が考えられる。生きる力の育成、共生する社会の想像、我が国の文化の継承と異なる文化に対する理解、他者も自分も大切にしている心情の育成。音楽の教科指導で終結するのではなく、音楽の授業が、生徒の人生につながり、世界に、未来につながる可能性を持っている。音楽の授業の先にある者を見つける授業展開を、今後研究していきたいと考えている。

VII. 終わりに

研究の機会を与えていただいたことで、鑑賞の授業を根本から見直す機会を得た。現に鑑賞教育に対する考え方が変わったという教師が多い。そして、考え方が変わった教師は、異口同音に「鑑賞の授業が好きになった」という。一度、鑑賞の授業の面白さが分かると、楽曲を流し、曲について解説し、感想を書くという授業には回帰しない。研究授業では情報交換が盛んになり、指導プランの検討だけでなく、音源や参考資料、ワークシートを持ち寄って研究会を進めることができるようになった。鑑賞グループが支援したブロック研究会では「魔王」を取り上げたのだが、検討会で創りあげた指導案を結果的にブロック内の各校が実施し、研究授業後の研究討議では、各自の実践も踏まえた意見交換ができ有意義な会となった。このことから、鑑賞の授業が一步前進したと言えるのではないかと考えている。

この日まで、勉強不足の上、何度も座礁しかけた。迷走し、しかもご示唆をいただいても理解力の乏しい私たちを見放さず熱心にご指導いただいた、奈良教育大学教育大学院教育学研究科 宮下 俊也教授に、まずお詫びと深い感謝を申し上げたい。

また、こうして研究の機会を与えていただいた、(公財)音楽鑑賞振興財団の皆様にも深く感謝申し上げます。このように時間をかけてひとつのテーマをグループで研究するという経験が、我々にはなかった。不手際もありご迷惑をおかけしたが、おかげで鑑賞教育が果たす役割と、鑑賞の授業だからこそ教えられることが見えてきたように思う。

研究に支援をいただいた全ての方々に感謝を申し上げますと共に、ご恩返しのためにも、研究の灯を絶やさず、さらに自主的で発展的な鑑賞の授業の実践を目指して、研究を進めていきたいと思う。

神戸市中学校教育研究会音楽部会

音楽部長	神戸市立向洋中学校	校長	小野原 豊
授業研究部長	神戸市立歌敷山中学校		和田 恵美子
	神戸市立垂水東中学校		壽 哲志
	神戸市立西神中学校		小柳 卓史
	神戸市立伊川谷中学校		江上 祐美
	神戸市立井吹台中学校		岡田 和郎
	神戸市立筒井台中学校		行天 めぐみ
	神戸市立渚中学校		西山 美加
	神戸市立魚崎中学校		塩谷 紀代美
	神戸市立兵庫中学校		大鳥 真由香
	神戸市立太田中学校		東田 亜樹子
	神戸市立福田中学校		伊東 祐司
	神戸市立垂水中学校		小田 真弓
	神戸市立星陵台中学校		濱田 佳歩
	神戸市立上野中学校		藤原 智代
	神戸市立御影中学校		辻本 幸江